

〔研究会報告〕

ラウンドテーブル「宗教・食・移民——トランスローカルな宗教実践の学際的考察」開催趣旨と報告

守屋友江

MORIYA Tomoe

はじめに 開催の趣旨とねらい

ラウンドテーブル「宗教・食・移民——トランスローカルな宗教実践の学際的考察」は、「食」という日常的な生活文化を切り口に「生きた宗教」(lived religion)の実践を明らかにしようとする試みである。ここでいう「宗教」は、聖典や教義に基づく神学やドグマとしての意味ではなく、共同体の年中行事に関わってシンボリックに登場する食べ物や儀礼、食べ方の作法といった実践面を中心に取り上げている。とりわけ、故郷を離れた移民を事例に、彼らのトランスローカルな宗教実践の具体的な姿を知る手がかりとして、学際的な視点から宗教と「食」に着目する。登壇者の東聖子氏、松本ユキ氏、桐原翠氏に執筆いただいた論考のように、カナダへ移民したシク教徒、アメリカで数世代にわたって暮らす日系仏教徒、マレーシア発の「ハラール産業」とヨーロッパ在住ムスリムの移民・難民の事例から捉えてみようという内容である。つまり、シク教といえはインドとパキスタンにまたがるパンジャーブ地方、仏教とくに浄土真宗といえは日本、イスラームといえは中東、という地理的前提にとらわれず¹、むしろ人とモノの国際移動によって宗教に関わる「食」のどんな実践が残存し、あるいは変容したのかというダイナミクスに着目している。

企画にあたり、文化人類学、アメリカ文学、地域研究を専門とする気鋭の研究者——あえて宗教学が専門ではなく、他領域で研究する方々——に発表していただくこととし

1. この点は、宗教の「正統性」に重きを置いて、シク教はパンジャーブ地方、浄土真宗は日本という地理的条件を基準にしたリ、生活習慣となった実践は「文化」であり聖典にこそ宗教の真髄があると主張したりする立場と関連するかもしれない。本ラウンドテーブルでは、その立場はとらない。

た。その理由は第一に、登壇者のお三方がそれぞれのフィールドで、移民の宗教実践に関する興味深い研究をされているためである。マイグレーション研究会の共同研究「移民の衣食住」の成果として刊行された『移民の衣食住 I ——海を渡って何を食べるのか』(河原・大原関 2022)で、松本氏は日系アメリカ文学の視点から、桐原氏はアフガン移民・難民の生存基盤の構築という視点から、それぞれ移民の「食」を宗教と関連付けた論文を発表されており、今回の企画にあたってお二人に登壇を依頼した次第である。東氏には、マイグレーション研究会 2020年10月例会での発表「スィク教徒移民とターバンから考える移民と装い」で、カナダ在住のスィク教徒移民にとって宗教が衣食住と密接に結びついていることを教えていただいたのを契機として、ラウンドテーブルでの発表を依頼した。

また第二に、移民の日常生活とホスト社会の文化を熟知されていることから、寺院や教会での活動にとどまらず彼らの生活文化に密接した「生きた宗教」のエスノグラフィが明らかにされることも、重要な要素である。というのも、南山宗教文化研究所ではキリスト教と仏教の宗教間対話や宗教哲学は頻繁に議論されるが、それ以外の宗教のことや、聖職者・知識人ではないごく普通の人びとの宗教実践については、関心が薄いように見受けられるからである。

そして第三に、こうした学際的な研究発表を通して宗教学と移民研究をより密接に結びつけ、宗教実践をトランスローカルな視点から捉えるという新たな研究の方向性を推進しようというねらいがある。

開催プログラムは下記の通り。平日開催ながら、47名の参加者があった。

日 時 2022年12月13日(火) 17時～19時

会 場 Zoom

発表者 東聖子氏(近畿大学国際学部)、松本ユキ氏(近畿大学文芸学部)、桐原翠氏(日本学術振興会特別研究員(PD)・当時)

司 会 守屋友江

本ラウンドテーブルの位置づけ

宗教、食、移民を学際的に検討する研究集会ということで、主に宗教学と移民研究の観点から本ラウンドテーブルを位置づけておきたい。宗教学の先行研究を移民との関連で概観すると、まず東京大学宗教学研究室のチームによる北米における日系宗教の網羅的研究がある(柳川・森岡 1981; Yanagawa 1983)。近年の宗教社会学では、日本へのニューカマーがもたらす宗教に関する研究が増えている(三木・櫻井 2012、三木 2017、高橋・白波瀬・星野 2018)。近代仏教史では、藤井(1999)、木場・程(2007)、安中(2008; 2017)、Masatsugu(2008)、Williams and Moriya(2010)、Ama(2011)、大澤(2015;

2016)、魚尾 (2019)、林 (2022)、末村・堀 (2022) らの蓄積がある。北米の日系キリスト教は、同志社大学人文科学研究所 (1991; 1997)、安武 (2000)、吉田 (2005; 2008) などの研究がある。これらが、いわば縦割りに研究されている状況がある。

宗教と「食」の関連では、日本宗教学会の機関誌『宗教研究』90巻2号 (2016年) において「食と宗教」の特集が組まれた。この特集号では、広義の宗教を「食」をめぐる様々な事例から論じており、今回のラウンドテーブルを企画する一つのきっかけとなっている。このうち、本多彩氏はアメリカに渡った日本人移民の仏教徒が独自に培った食文化を取り上げる。本多論文が他と異なるのは、研究対象が生まれ故郷の文化や宗教伝統から切り離された国で暮らしている点であり、したがって異文化の地で生じた「食文化の変遷」がテーマとなっている (本多 2016)。とりわけ、寺院で調理し料理を提供する担い手でありながら、なかなか研究の俎上に載らない女性メンバーの活動が明らかにされており、宗教研究にとって「不可欠」な「ジェンダーの視点」(猪瀬 2019, 4 - 5) からいって見逃せない点である。

一方、日本における移民研究、とくに日本人移民を対象にした分野において、宗教対象を取り上げることがまだそれほど多くはない。しかし先行研究が少ないにもかかわらず、日系移民自身は、北米における百数十年の歴史の中で様々な宗教施設を各地に設立してきたのである。この研究者の認識と研究対象との齟齬という問題は、以前指摘したので詳細は省くが(守屋 2008, 115-16; 守屋 2019, 17)、さきの本多論文と考え合わせると、移民を生活者として捉え、彼らの日常を明らかにしようというアプローチは、自ずとその宗教に着目することになるといえる。

この点で、先述した『移民の衣食住』は、宗教学を専攻する研究者にとっても注目すべき一冊である。天理教の北米地域の責任者であった橋本正治の日記を手がかりに、戦時強制収容所での食事とその抑留生活をめぐる考察のほか (尾上 2022)²、多くの論考で宗教との関わりで「食」の事例が記されている。例えば、ユダヤ系移民の祝祭日とロサンゼルス農産市場との関連、ムスリムと非ムスリムをつなぐ役割を果たす在米トルコ系移民のコーヒーやチャイ、在日フィリピン人の手料理とキリスト教的に意味づけられる食材、在日コリアンの祭祀で提供される食とその変容などである (河原・大原関 2022)。

今回のラウンドテーブルの発表であらためて確認できたことの一つとして、宗教と「食」が人と人をつなぐ新たな場を提供している点があげられる。シク教徒のランガルが free community kitchen と訳されるのは、「食」がもつ共同体の紐帯としての役割をよく示している。人々の日常生活に欠かせないものであるからこそ、移民たちは異文

2. ハワイと北米大陸の天理教について、アメリカ法制史を専門とする山倉明弘氏 (1994; 1999; 2019 など) による天理教布教師の戦時抑留に関する一連の研究は必見である。

化の地でも「食」と結びついた宗教実践を続けるために工夫するのである。異文化の地に移民が持ち込んだ「食」と宗教は、自分たちのアイデンティティを再確認する実践でもあり、移民コミュニティとホスト社会を結びつける役割をも果たしている。

そしてまた、移民がもたらす「食」と宗教は、新たな文化を創造する源泉になりうることも明らかになった。移民たちは、調理をしながら母国や移民先の言葉で会話を交わし、クックブックに宗教や文化伝統の物語を織り交ぜて次世代に伝え、レシピに工夫を凝らす。そういう「食」をめぐる味や匂い、調理作業などの記憶は、作家の文学的想像力を喚起して、小説あるいはノンフィクション作品として描かれる。また、移民がホスト社会の文化的・社会的状況に適応するだけでなく、人とモノのグローバル化によって、ハラール産業のようにむしろ「新たな消費文化」を生み出すこともあるのだ。

ラウンドテーブルでの議論について、全てを語り尽くすことはできないが、本誌に寄稿して下さったお三方の論文を通して、さらなる学際的なインスピレーションが生まれれば望外の喜びである。

まとめにかえて

東氏、松本氏、桐原氏には、平日夕方の開催にも関わらず発表をご快諾いただき、また当日の議論を踏まえた論考を本誌にお寄せ下さり、心から感謝申し上げます。また、開催前の事前打ち合わせにおいても非常に興味深い話題を提供いただき、時間の経つのを忘れるほどであった。この充実した打合せの段階から、ラウンドテーブルは始まっていたといえるかもしれない。そして開催当日も、参加者の方々から活発な質疑応答をいただけたことは、望外の喜びである。ラウンドテーブル終了後も発表者と一部の参加者とともに、宗教と食と移民をめぐる議論で盛り上がったことを付け加えて擱筆したい。

参考文献

- Ama, Michihiro. 2011. *Immigrants to the Pure Land: The Modernization, Acculturation, and Globalization of Shin Buddhism, 1898-1941*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 安中尚史. 2008. 「近代日蓮宗の海外布教に関する一考察——植民地布教と移民布教を比較して」『日蓮教学研究紀要』no. 35: 1-14.
- . 2017. 「シンポジウム 移民布教と仏教文物」『近代仏教』no. 24: 60-65.
- 同志社大学人文科学研究所編. 1991. 『北米日本人キリスト教運動史』PMC出版.
- . 1997. 『在米日本人社会の黎明期——「福音会沿革史料」を手がかりに』現代史料出版.
- 藤井健志. 1999. 「戦前における仏教の東アジア布教——研究史の再検討」『近代仏教』no. 6: 8-32.
- 林行夫編. 2022. 『日本と東南アジアの仏教交流——その史実と展望』三人社.
- 本多彩. 2016. 「アメリカ仏教会における食文化の変容」『宗教研究』90, no. 2: 157-82.

- 猪瀬優理. 2019. 「新宗教におけるジェンダー——信仰体験談と生命主義的救済観」『宗教研究』93, no. 2: 3-29.
- 河原典史・大原関一浩編. 2022. 『移民の衣食住 I ——海を渡って何を食べるのか』文理閣.
- Masatsugu, Michael K. 2008. "Beyond This World of Transiency and Impermanence": Japanese Americans, Dharma Bums, and the Making of American Buddhism in the Early Cold War Years. *Pacific Historical Review* 77, no. 3 (August): 423-51.
- 三木英編. 2017. 『異教のニューカマーたち——日本における移民と宗教』森話社.
- 三木英・櫻井義秀編. 2012. 『日本に生きる移民たちの宗教生活——ニューカマーのもたらす宗教多元化』ミネルヴァ書房.
- 守屋友江. 2008. 「戦前のハワイにおける日系仏教教団の諸相」『立命館言語文化研究』20, no. 1: 115-16.
- . 2019. 「『太平洋の交差点』の日本仏教——グローバル化とローカル化の交錯」『立命館言語文化研究』31, no. 1: 17-31.
- 尾上貴行. 2022. 「戦時下のアメリカ抑留所における食事——「危険な敵性外国人」として収容された日系人たちの食生活」河原典史・大原関一浩編『移民の衣食住 I ——海を渡って何を食べるのか』文理閣, 120-45.
- 大澤広嗣. 2015. 『戦時下の日本仏教と南方地域』法藏館.
- 大澤広嗣編. 2016. 『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』勉誠出版.
- 末村正代・堀まどか. 2022. 「二〇世紀前半期の米国における仏教者リスト——一九三〇年代の日本人開教使による記録から」『近代仏教』no. 29: 135-147.
- 高橋典史・白波瀬達也・星野壮編. 2018. 『現代日本の宗教と多文化共生——移民と地域社会の関係性を探る』明石書店.
- 魚尾和瑛. 2019. 「戦前期における布哇浄土宗教団の展開過程」大正大学提出博士学位論文.
- Williams, Duncan Ryūken and Tomoe Moriya, eds. 2010. *Issei Buddhism in the Americas*. Urbana: University of Illinois Press.
- 山倉明弘. 1994. 「日米開戦と天理教アメリカ伝道庁長橋本正治」『天理大学学報』46, no. 1: 1-22.
- . 1999. 「天理教布教師瀬戸直一の語る戦時抑留体験」『天理インターカルチャー研究所研究論叢』no. 8: 21-71.
- . 2019. 「信仰者の戦時強制収容体験が教えるもの」『おやさと研究所年報』25: 63-72.
- 柳川啓一・森岡清美編. 1981. 『ハワイ日系人社会と日本宗教——ハワイ日系人宗教調査報告書』東京大学宗教学研究室.
- Yanagawa, Keiichi, ed. 1983. *Japanese Religions in California: A Report on Research within and without the Japanese-American Community*. Tokyo: Department of Religious Studies, University of Tokyo.
- 安武留美. 2000. 「北カリフォルニア日本人移民社会の日米教会婦人たち——日系一世女性のイメージを再考する」『キリスト教社会問題研究』no. 49: 46-76.
- 吉田亮編. 2005. 『アメリカ日本人移民の越境教育史』日本図書センター.
- . 2008. 『ハワイ日系2世とキリスト教移民教育——戦間期ハワイアン・ボードのアメリカ化教育活動』学術出版会.

もりや・ともえ
(南山宗教文化研究所)